

シルバーハウジングにおける生活実態に関する研究

谷本 道子・櫻井 のり子*・山口 明日香**・杉山 尚美

A Study on the Living Conditions of Senior Citizen's Housing Project

Michiko TANIMOTO, Noriko SAKURAI, Asuka YAMAGUCHI
and Naomi SUGIYAMA

緒言

シルバーハウジング（以下SH）プロジェクトは、1987年度から建設省（現在の国土交通省）の住宅施策と厚生省（現在の厚生労働省）の福祉施策の連携をもとに、高齢者単身・夫婦世帯が自立し、安全かつ快適な生活を営むことができる住宅と共に、緊急対応などの人的なサービスが受けられる公共住宅の供給を推進する目的で、国の事業として実施されるようになった。主として公営住宅として供給され、愛知県では、1990年度から事業計画として策定され、県や市町村により供給されてきた。2009年3月末現在、シルバーハウジングは全国で858団地、22985戸あり、愛知県内では市営・県営含め58団地、1089戸ある。

住宅の構成としては、下層階にSHを配置し、上層階に一般住宅を重ねたものもあるが、名古屋市営住宅はすべてSHのみで一棟を構成している。建物は、バリアフリーで高齢者向けの設備や構造を備えており、住宅によっては、デイサービスセンターや特別養護老人ホームが隣接しているものもある。

また、SH設置者が業務を委託した、それらの施設から派遣されるライフサポートアドバイザー（生活援助員、以下LSA）による、安否確認、生活指導、一時的な家事援助、緊急時の対応、関係機関との連絡、その他日常生活に必要な援助などのサービスが行われている。

そこで本研究は、SHの居住者に対し、世帯構成や前住宅の状況、SHの選択理由、評価、子・孫世帯との関係、日常生活状況について調査を実施し、今後の高齢者向け住宅についての知見を得ようとするものである。

方法

名古屋市内で最初期に供給されてから約15年を経た3SHを対象に、居住者に対する聴き取り調査を実施した。単身者向け49戸の内の20世帯、2～3人向け18戸の内の9世帯、計29世帯37人から回答を得た。調査期間は2010年3月および7月である。調査内容は、居住者の世帯構

* 金城学院大学

** 静岡県立静岡中央高等学校

成、健康状態、就労状況、入居時期、住宅の選択理由、緊急通報装置の使用やLSAの支援内容、SH内あるいは近隣との交流、日常生活の状況、LSA以外に受けている介護サービス内容、今後の予定や希望などである。

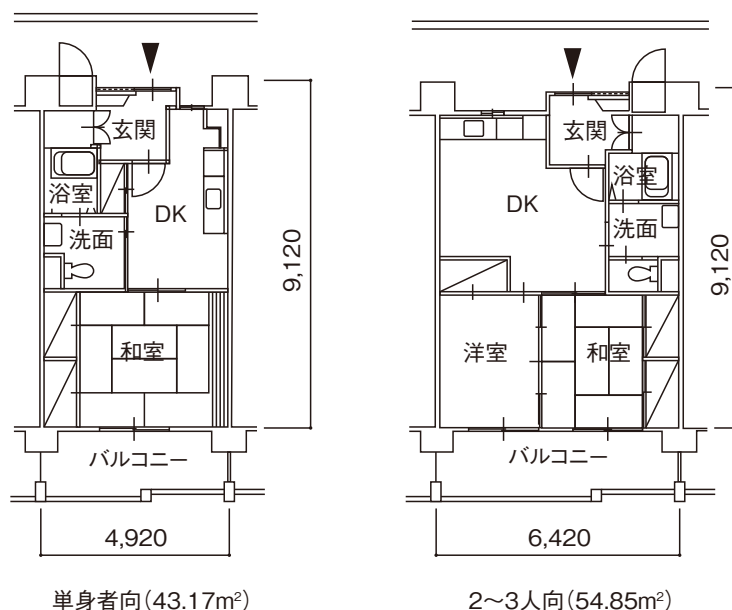


図. 住戸平面図 (S. 1 : 200)

結果と考察

1. 世帯の属性

世帯構成は、女性の単身世帯が29世帯中20世帯と多く、夫婦のみの世帯が8世帯で、男性単身世帯は1世帯のみである。居住者の年齢は、75歳以上の後期高齢者が84%、その中でも80歳以上の居住者が全体の49%を占めている。これは、新築時に入居した世帯が多く、55%が入居後10年以上経過しているためである。

2. 就労状況と収入

居住者の現在の就労状況は、95%が無職である。最長職（これまでに最も長く就いていた職業）勤務形態は、自営14%、常勤32%、パート・アルバイト24%で、70%の人が何らかの形で収入を得ていたといえる。また、無職であった居住者22%の殆どが女性であることから専業主婦であったことがうかがえる。現在の主な収入源は、公的年金を受給している世帯が28世帯である。それ以外の年金を受給している世帯が3世帯ある。それらに加え、パートタイマーとして収入を得ている世帯や、子世帯から仕送りを受けている世帯、預金を崩しながら生活費の足しにしている世帯もある。

3. 前住地と前住宅

居住者の前住地は、名古屋市内が16世帯で56%と約半数を占め、その他は愛知県内が5世帯、愛知県外が5世帯である。前住宅の所有関係は、58%が公営や民間の借家、31%が持ち家である。その他に、子の持ち家が1世帯、居住者の借地持ち家が1世帯ある。

前住宅を出た理由は、「高齢化に伴い住みづらくなったから」「一人あるいは夫婦だけの生活が不安だったから」「立地が悪く不便だったから」「シルバーハウジングだから」など、高齢化に伴い身体機能が低下したために生活への不安を感じたことを理由としている世帯が48%を占めている。その他に、家族構成の変化や経済状況の悪化、高齢者のみの生活を心配した子や孫から勧められた、大家が亡くなり立ち退くことになったためといった理由もある。

4. 現住宅の選択と評価

現住宅の選択理由は、「新築だから」「立地が良いから」「家賃が安いから」といった一般的な住宅の選択理由が38%、「シルバーハウジングだから」「市の広報を見て興味を持ったから」といったものが45%ある。

現住宅の満足している点は、住宅の選択理由にもあったように「家賃の安さ」、手すりなどの「住宅の設備」、「周辺環境の良さ」などの評価が高い。不満に思っている点は、洗面所に給湯設備がない、電話のメモリー機能が少ない、給湯器でバスタブに湯をはると湯が入りすぎるなどの「住宅の設備」、騒音や坂道、夜道が暗いなどの「周辺環境」、日が入りすぎるといった「採光」、「間取り」があげられる。「間取り」に関しては、「子どもが泊まれる部屋がほしい」「ベッドがおける場所がほしい」などの要望があった。また、住宅の名前に「シルバー」とついていることが気になるといった意見もあり、「シルバー」という言葉にマイナスのイメージを感じているようだ。

5. 子供との関係

前住宅での家族構成については、約半数は未婚または既婚の子との同居であるが、単身世帯が10世帯、高齢者夫婦世帯が2世帯、兄弟姉妹世帯が1世帯である。29世帯中、子供がいない世帯は5世帯である。子供がいる24世帯の内、「同居したい」と答えたのは1世帯、「同居したくない」と答えたのは23世帯である。

子供がいるが同居をしていない理由には、「気楽だから」24%、「家族の人間関係」17%、「娘が結婚して嫁にいったから」17%であり、子や親族へ迷惑をかけたくない、気を使わせたくないなどといった居住者の気持ちがかがえる。そのため、表面的には同居を希望していないと答えているが、子世帯との関係が良好であったり、相手側から同居を申し出てくれた場合は同居したいと思っている世帯は少なくないとみられる。反対に、過去に自分が舅や姑と同居し、あまりいい思いをしなかった経験があるため子世帯と同居したくないと言う声もあった。その他に、「知らない土地に行きたくない」が10%あった。ここから、遠方へ行くことに不安を感じているだけでなく、今まで築いてきたコミュニティーを離れたくない、あるいは、高齢になってから新しく人間関係を築くことが難しいと感じていることがわかる。

介護が必要になった時の要望は、「子どもとの同居を希望している」が3世帯、「老人ホームに入りたいと考えている」が7世帯、「病院へ入院する」が2世帯である。老人ホームに関しては、自分に合うかどうか既に下見に行っている世帯や、入所する際に時間がかかることを考え、介護が必要になったときにできるだけ早く入所できるよう既に申し込んである世帯もあった。病院に関しては、病状によって異なるが、一定期間以上入院し退院した後も居住できるかどうか

心配する世帯もある。また、現状のままヘルパーなどの助けを借り、SHで生活をしたいという世帯も5世帯あった。しかし、SHの入居資格に「独立して生活するには不安があると認められるが、自炊が可能な程度の健康状態である高齢者世帯であること」とあるため、表現が曖昧ではあるが、日常的に介護が必要になった場合、現状を維持することは難しく、健康状態によっては退去しなくてはならない。よって、未定と答えた8世帯と同様、現状のままと答えた世帯も問題がでてくる。

6. 健康状態と自立度

健康状態は、「健康である」が27%、「まあまあ健康」が38%、「健康でない」が30%である。日常生活の自立状態は、「日常生活（歩行、調理および食事、着脱衣、入浴、排泄など）には支障はない。介護認定は受けていない。」が64%、「日常生活には支障がある。介護認定は受けていない。」が14%、「日常生活には支障がある。介護認定は受けている。」が22%である。

病院や診療所への通院頻度をみる。3SHの周辺には、大きな病院の他にも内科や整形外科をはじめとする診療所など医療機関が充実している。「週に1回」以上通院している居住者は51%、「2週に1回」「月に1回」まで合わせると92%の居住者が何らかの病気を抱え通院していることがわかる。また、SH居住者の配偶者が、周辺の病院に入院しているため、この地域に引っ越してきたという世帯もある。

7. 日常生活

買い物に出かける頻度は、「毎日」、「2日に1回」、「3日に1回」を合わせて66%である。3SHとも徒歩10分程の所にスーパーやドラッグストアなど日常的に必要な施設が整っており、買物の利便性が良いと評価する居住者が多い。しかし、3SHの周辺には、なだらかではあるものの坂道があり荷物を持って帰るにはつらいという意見もあった。そのためか、食料品や日用品の買い物に宅配を利用したり、ヘルパーに買い物をまとめて頼む居住者もいる。

外出の頻度は、「毎日」、「2日に1回」、「3日に1回」が38%であるが、「外出をしない」が21%であり、家に引きこもりがちな居住者は少なくない。

利便性が良いことから、交通手段としては60%が公共交通機関を利用している。

8. コミュニティー

SH内での交流は、「世間話」や「挨拶をする人がいる」が52%、「交流なし」は7%である。

SH内での今後の交流については、「今のままでよい」が48%、「深めたい」が14%、「距離をおきたい」が10%である。入居当時は、俳句の会、カラオケ大会やお茶会を行ったりして密な交流があったが、しだいに付き合いが難しくなり、今は疎遠になっているというSHもある。年1回の自治会総会として集会室で昼食を一緒にとっているSHもある。

近隣地域との交流は、「世間話」や「挨拶をする人がいる」が31%であり、「交流なし」は45%と約半数である。

近隣地域との今後の交流については、「今のままでよい」が48%、「深めたい」が14%、「距離をおきたい」が10%である。

親族と会う頻度は、半数以上の世帯が年に1回会う程度である。親族との交流も少なく、SH内でも希薄な人間関係の中で相談する人もなく、近隣地域との交流も少ない様子がうかがえる。

9. 生活支援

緊急通報装置の使用経験は、「使用した」が3%、「使用なし」が63%、「誤って押してしまった」が33%である。入居当時は誤って押してしまうことが多かったようである。緊急通報装置の必要性は、「必要でない」が55%、「必要である」が39%である。入居して10年以上経過している居住者が多いものの、未だ居住者の自立度が高く、日常生活に大きな支障をきたしていないため、必要性を高く感じていない居住者が多いといえる。

LSAに会う頻度は、「1週間に2,3回」が半数を占めている。「1週間に1回」が24%、「ほぼ毎日」が17%である。LSAとの面接時間は、「15分以内」が大多数で、安否確認だけの場合は2～3分である。相談経験があるという居住者はわずかで、相談内容としては、隣人の騒音問題・生活相談・ヘルパーの紹介・医者や買物場所の紹介などである。

LSAへの期待や要望については、現状に満足しているが55%で、要望として、「訪問時間を延ばし、じっくり話を聞いてほしい」「土日も対応してほしい」が17%あった。健康で日常的に外出が多い居住者は、月1回会うかどうかであった。また、自分の留守中にLSAが訪問した場合はそれがわかるメモなどを残して欲しいという意見もあった。

10. 地域支援サービス

2つの住宅のみであるが、希望している地域支援サービスの内容は、「病気時の看病」、「清掃サービス」、「買物サービス」、「洗濯サービス」、「給食サービス」などがある。家事への意欲や能力が低下していることと関係すると考えられる。

11. まとめ

市営シルバーハウジングを対象とする聴き取り調査を実施し上記の結果を得たが、ここで、ほぼ同時期に供給された県営シルバーハウジングを対象とする調査結果¹⁾と合わせて見てみる。公共交通機関や生活関連施設の利便性等、立地条件は大きく異なる。建築や設備についてはいずれも評価が高いが、県営は棟の下層階がSHで上層階が一般住戸であるのに対し、市営は棟全体がSHとして建てられている。世帯構成は女性単身が多いことや、現在はほぼ全員が無職であるが、最長職は常勤や自営を中心に安定した収入を得ていたことなどはほぼ同様である。入居の経緯は大きく異なる。県営は老朽化した県営住宅の建替えに伴い設置されたもので、建替え前の居住者が優先的に多く入居しているのに対し、市営では全世帯が当選して入居した。そのため、県営では既にコミュニティの中に居る優先入居者と外来者の関係について、市営ではほぼ全戸がお互いに深入りしない関係を保とうとすることなど、コミュニティ形成に異なる課題が見られた。入居時年齢はいずれも70歳前後で、供給開始後の年数に伴い高齢化が進行している。LSAの業務範囲については、いずれも理解が困難であることが聴き取れた。

要約

シルバーハウジングの居住者に対し、世帯構成や前住宅の状況、SHの選択理由、SHに対する評価、子・孫世帯との関係、日常的な生活状況について調査を2010年3月および7月に実施し、以下の結果を得た。世帯構成は女性の単身世帯が3分の2を占める。半数以上が入居後10

年以上を経過しているため、後期高齢者が多く80歳以上が半数を占める。ほぼ全世帯が無職であるが、最長職では常勤や自営などで安定した収入を得ていた。前住地は名古屋市内が半数以上である。子がいる世帯が8割以上を占めるが、気楽だからなどの理由でSHを希望した。SHの特長をよく理解して申し込み当選した。立地、建築、設備、家賃の評価が高い。現在のところ日常生活に支障がない世帯が多いが、今後の健康や入退院後のSH居住に不安を抱えている。ライフサポートアドバイザーや介護保険によるサービス等には関心が高い。SH内および近隣地域との交流は希薄である上、今後についても多くは消極的である。

謝辞

本調査研究にあたり、3SHの自治会長さんをはじめとする居住者の方々や、LSAさん、特養の皆さんに御協力頂きました。また、本学生活環境学科2011年卒業生の岡田衣代さん、日下部美季さん、清水麗花さんには聴き取り調査の協力をして頂きました。記して謝意を表します。

文献

- 1) 谷本道子：愛知県営牛久保住宅シルバーハウジングの居住実態に関する研究，名古屋女子大学紀要，第44号 家政・自然編，p.111-119（1998）